



# 矢島 里佳 さん

株式会社和える代表取締役

## PROFILE

慶應義塾大学在学中に株式会社和えるを設立し、大学院に進学。学業と経営を両立させつつ、「0から6歳の伝統ブランド aeru」を生み出した。全国の職人とともに、伝統を次世代につなげることをミッションに、販売・プロデュースなど新たな事業の開発にも注力している。

## 地域や職人の力で支えられた日本の伝統を“和える”活動で伝える感性の経営者

中学時代より伝統に興味を持ち、子どもたちに日本の伝統をつなげたいという想いから、慶應義塾大学4年生時に株式会社和えるを設立。大学院に進学しながら経営を始める。その後、「0から6歳の伝統ブランド aeru」を立ち上げて、全国の伝統産業職人の技術を活かしたオリジナル商品の企画・販売を手がけ、ヒット商品の「こぼしにくい器シリーズ」ではグッドデザイン賞2013を受賞。世界経済フォーラム（ダボス会議）の「World Economic Forum-Global Shapers Community」メンバーに選出された。ホテルの部屋をプロデュースする aeru room 事業や、個人・法人向けの aeru oatsurae 事業など新規事業も展開中。“和える”ことで多様な価値を創出する、感性豊かな経営者に話を聞いた。

## 日本の伝統を次世代の子どもたちにつなげたい

—ご著書の『和える-aeru-』（早川書房）を拝読しました。現在の事業について教えてください。

日本の伝統を次世代の子どもたちにつなげたいという想いから、伝統産業の技術を活かした、赤ちゃん・子どもが大人になっても使い続けられる日用品の企画・販売を手がけています。

私は大学4年生のときに会社を設立し、その1年後に「0から6歳の伝統ブランド aeru」を立ち上げました。当初はオンラインショップのみで販売していましたが、現在は東京と京都に直営店も構えています。

商品はすべて、伝統産業の職人さんの手仕事によって作られており、成長してからも長く使えるもの、もしくは引き継いでいただけるものを中心に開発を行っています。ヒット商品の「こぼしにくい器シリーズ」は、ご家族でお使いいただくことも多い商品です。

起業後、私は大学院に進学することにしたため、しばらくは大学院で学びながら経営するという状態でした。起業時には経営者の先輩から、「3年・5年・10年が特に大事だよ」と言われましたが、本当にそうだなと感じています。

3年目は、私自身がどれだけ頑張れるかを試されていたように思いますが、5年目は自分だけが頑張ってもダメで、チーム力や組織力を試される時期だと感じています。これから迎える10年目は何を試されるのだろうかと考えていますが、まずは10年を迎えられるように頑張るしかありません。

—10年目は、変革を求められるのではないのでしょうか。

たしかに、社内の変革が必要になっているかもしれません。

当社はまだまだビジネスの確立期で、たとえば生産ロットなども商品によって違います。伝統産業とひとりで言っても、和紙、ガラス、陶器、漆器など、それぞれ異なる業種業態なのです。

また、それぞれの職人さんの状況に合わせて、物事を変えていくことが必要だと考えています。そのためには、先のことを話しておかなければなりませんので、職人さんとの対話を大事にしています。

地域とのつながりが強い職人さんには、各地のお祭りや行事とも深くかかわりながら仕事をしている方が多くいらっしゃいます。そのため、地域のリズムや暮らしのテンポを理解することも大事です。伝統産業は、地域に根差した産業なのです。

また今年からは、新規事業もスタートしています。これまでは、「0から6歳の伝統ブランド aeru」の事業に特化してきましたが、伝統を次世代につなげていくためには、伝統や先人の智慧と出逢える入口を、もっと日常の暮らしの中に増やしていくことが必要だと考えています。大人の方々にもぜひ、暮らしの中で伝統産品に触れていただきたいですね。

—子どもへの展開だけで拡大されるのかと思っていましたが、良い意味で裏切られました。とてもしなやかに事業を展開されているイメージです。

伝統産業への理解について、赤ちゃん・子どもからだけでなく、さまざまな入口を作るために、新規事業への挑戦を始めているのです。先人の智慧を伝えることが私たちのミッションだと思っていますので、赤ちゃん・子どもに限定しているわけではありません。現在は、2つの新規事業を立ち上げるところです。

1つは「aeru room」という事業です。これは、「地域が育んできた先人の智慧」と「ホテルの一室」を和えることで、次世代に伝統をつなぐ新たな事業です。「宿泊を通じて、その土地が育んできた伝統産業や文化、歴史に触れ、魅力に浸り、気づき、滞在を存分に楽しめるお部屋を」と考え、その地域に由来する伝統産業の職人さんの技を活かしたものや、触れることで滞在中の楽しみが高ま